# 茨　城　大　学　学　報

第337号
平成30年2月～平成30年3月

梅の花咲く水戸キャンパス

## INDEX

◆　教育学部附属中、統合 60 周年記念式典を盛大に開催
◆　人文社会科学部と茨城県大子町が連携協力の協定を締結
◆　全学教職センター高大接続事業で茨城県北の 3 高校が協働
◆　国際岡倉天心シンポジウムの記録集を刊行
◆　図書館「土曜アカデミー」開催 100 回達成
◆　【茨城大・東京医科大・茨城県立医療大】第 10 回三大学交流セミナー
◆　ロードアイランド大学の学長による大学経営戦略に関する講演を実施
◆　授業デザインをアクティブ・ラーニングで学ぶ教員研修
◆　学生発案のバス案内板が水戸駅にお目見え



茨城大学広報室
TEL 029-228-8008
FAX 029-228-8019

## ◆　教育学部附属中、統合 60 周年記念式典を盛大に開催

教育学部附属中学校が 2 月 1 日（木）、統合 60 周年記念式典を茨城県民文化センター大ホールにて開催しました。卒業生である茨城県の大井川 和彦 知事らを来賓に迎え、同校生徒 479 人のほか、教職員、保護者、卒業生などが出席しました。

同校は、1958（昭和 33）年、茨城県師範学校男子部の附属中学校をルーツとする附属水城小中学校と、同女子部の附属中学校をルーツとする附属愛宕小中学校が統合される形で創立されました。以来、教育学部とともに実践的な研究に取り組み、公開研究会等の機会を通して地域の中等教育に対して重要な役割を果たすとともに、各界で活躍する多彩な人材を輩出しています。

来賓として出席した茨城県の大井川和彦知事は、合唱コンクールや宿泊学習のエピソードを披露したほか、「勉強についてはクラスのみんなから刺激を受けた。ちゃんと計画を立ててやってみて、何がうまくいかなかったかを分析してもう一度やり直す。その大事さを附属中で初めて学んだ」と振り返りました。また、在校生たちには、「変化の激しいこれからの時代に対応するために、自分の軸をつくり、充分に活躍できる人材に育ってほしい」とエールを贈りました。

また、同じく卒業生を代表する来賓として出席した参議院議員の藤田幸久氏は、現在の附属中の場所にかつて陸軍水戸第二連隊の兵舎があったことに触れ、「歴史に学び、今の世界、戦争と平和ということについて考えてほしい」と語りました。

諸先輩のスピーチを受け、統合６０周年事業実行委員会の委員長を務めた３年生の川勾恒太郎さんは、１、２年生の後輩たちへ向けて、「この歴史を止めることなく、これからの附属中生へと受け継いでもらいたい。そして、この附属中学校を、６０年前からの伝統を残すとともに、現在よりも良い生活を送れる学校にしてほしい」と呼びかけました。

その後は、同校独自の「グローバル市民科」という取り組みで学んだ成果の紹介や、生徒たちが作詞・作曲に取り組んだ記念歌「みち」の合唱、６０年のあゆみを紹介するプレゼンテーションなど、在校生たちの手づくりによる企画が次々と展開され、同校の歴史のあゆみと未来への役割を改めて強く実感する催しとなりました。

卒業生の大井川和彦茨城県知事による
スピーチ

60 周年記念式典で校歌を
合唱している様子

## ◆　人文社会科学部と茨城県大子町が連携協力の協定を締結

本学人文社会科学部と茨城県大子町が、2 月 2 日（金）、連携協力に関する協定を締結しました。この日本学人文社会科学部長室で行われた締結式には、大子町の綿引久男町長らが出席し、協定書にサインをするとともに、今後の取り組みについての意見交換を行いました。

この協定は、同学部が有する知的財産や学生の力と、大子町がもつ地域資源や地域人材を活かし、地域課題の解決や共同研究、あるいは学生目線による提案などの取り組みを相互に協力して行い、人口減少社会の現状を踏まえた地域の発展と人材の育成を図ることを目的としたものです。なお、人文社会科学部と茨城県内の自治体との間で締結される連携協定は 11 自治体となります。

具体的には、①地域特性を活かした産業の振興とまちづくり推進、②地域の発展に寄与する人材の育成、③人材交流の地域コミュニティの活性化、④地域の政策課題に関する協働研究の推進、⑤歴史と文化の継承 といった事業に取り組みます。

調印式で佐川泰弘学部長は、「本学と大子町はこれまでも調査・研究や教育の場面でさまざまな協力をしてきたが、協定締結を機に今まで以上に協力していきたい。今年度、人文学部から人文社会科学部に改組してカリキュラムを一新し、すべての学生が地域の協力によって学外へ出て学ぶことになったので、大子町と連携できることは心強い。また、大子町は長い間子育てや少子化対策に取り組んできた町であり、研究面でも引き続き協力できればと思う」と意気込みを語りました。

また、大子町の綿引町長は、県内の市町村の中で最も高齢化が進んでいる現状とともに、子どもの医療費や保育費の無料化といった少子高齢化対策の独自の取り組みを紹介した上で、「多くの課題があるが、まずは町の総合計画の策定においてご指導をいただきたい。これからも連携して住みよいまちづくりを進めていきたい」と述べました。

協定書を手にする佐川学部長（左）と綿引町長ら

## ◆　全学教職センター高大接続事業で茨城県北の 3 高校が協働

本学全学教職センターが、2 月 17 日（土）、高校生に教師という職業の魅力を知ってもらうことを目的とした高大接続事業を、茨城大学水戸キャンパスで実施しました。当日は茨城県北地域に位置する 3 つの高等学校の 30 人の高校生が、地域の PR 動画を作成するワークショップとゲスト講師を迎えての発表会に臨みました。動画作成は学校の枠をこえた初対面のグループでの作業にもかかわらず、個性あふれる作品が仕上がりました。

ワークショップでは、茨城県立大子清流高等学校、小瀬高等学校、常陸大宮高等学校の 3 つの高校から 10 人ずつの生徒が参加。7 つのグループに分かれ、「食」「観光」「歴史」といったテーマで、茨城県北地域を PR する 1 分程度の動画制作に取り組んだ。動画は小中学生に観てもらうことを想定して作り、制作にあたっては多くの小中学校の現場でも活用されている「ロイロノート」という iPad アプリケーションを使用しました。

発表会では、常陸大宮高等学校の長島利行教頭の進行のもと、常陸大宮市でブルーベリー農園の運営など食に関わる取り組みを進めている小口弘之氏、茨城大学人文社会科学部の西野由希子教授、茨城県教育庁の石井純一高校教育課長といったゲスト講師らへ向けて披露し、工夫した点や込めた思い、感想などを発表しました。7 つの動画はいずれも、小中学生の視点を意識した構成やナレーションの工夫が施されており、生徒たちが互いに持ち寄った情報やアイディアを活かして制作に取り組んだことが伝わる内容となりました。

参加者のひとり、大子清流高校の大高未来さんは、「初めて会ったメンバーで最初は壁もあったが、だんだんと同じテンションをもっていることに気付き、和気あいあいと作れた。楽しんでもらえて良かった」と感想を述べました。また、会場で生徒たちの動画を鑑賞し、発表を聞いた教師からは、「お互いがお互いを信じあう姿が見られ、尊重しあえることの素晴らしさを感じた。工夫された動画を見て、自分も『こういう構成の授業ができたら』と思った」など、高校生たちの協働による作品の出来栄えを評価する声が聞かれました。

PR 動画の発表会の様子

本学全学教職センターの小川哲哉センター長は、「ICT を使って何かを作り、発表するスキルや能力は世界中で求められている。ただ、大事なのは映像技術よりも中身であって、何を伝えたいかという意志だと思う。初対面の仲間たちのグループでありながら、各班ともそれぞれの個性が発揮されていて素晴らしい動画ができた」と、一連の活動を総括しました。

## ◆　国際岡倉天心シンポジウムの記録集を刊行

茨城大学では、一昨年開催した「茨城大学 国際岡倉天心シンポジウム 2016」の記録書籍をこのほど刊行しました。茨城大学社会連携センター・五浦美術文化研究所編『岡倉天心　五浦から世界へ―茨城大学国際岡倉天心シンポジウム 2016』、思文閣出版。国内外の岡倉天心研究者による講演・パネルディスカッションの内容、2 日目のツアー企画「五浦探訪」の報告のほか、六角堂の復興についての貴重な記録や五浦美術文化研究所の収蔵資料なども収録されており、天心の人生や思想における五浦時代の意義や代表作『茶の本』との関わりを多様なアプローチによって再確認できる１冊となっています。

思想家・岡倉天心は晩年の 10 年間、北茨城の五浦海岸に拠点を移し、横山大観らの画家とともに活動しました。岡倉が設計した六角堂（東日本大震災の津波で流失したあと再建）や当時の邸宅などの史跡は、昭和 30 年に茨城大学に寄進され、本学五浦美術文化研究所を拠点に管理と調査・研究を行っている。同シンポジウムでは、文化の力を信じ、行動した岡倉の姿が浮かび上がるとともに、これまで不遇の時代とも評されてきた五浦での 10 年間を、岡倉が最も国際的に活動した時代であり、その活動拠点として五浦を捉える視座が示されました。

今回刊行した書籍では、これらの講演・シンポジウムの内容や、翌日に行われたツアー企画「五浦探訪」について、写真や図版等の資料とともに収録しています。加えて、書籍の後半には、東日本大震災で消失した六角堂の復元プロジェクトの記録や、「天心を理解する１０の遺品」と題して、茨城大学五浦美術文化研究所が所蔵する美術資料を抜粋して紹介しています。

## ◆　図書館「土曜アカデミー」開催 100 回達成

本学図書館が実施している公開イベント「土曜アカデミー」のプログラムが、2 月 17 日（土）に行われた「古文書寺子屋 はじめの一歩」をもって開催 100 回を達成しました。同講座では、参加者に 100 回を記念して作られたオリジナルクリアファイルが配られ、会場で記念のセレモニーが行われました。

「土曜アカデミー」は、平成 26 年 10 月、水戸キャンパスの図書館がリニューアルされたのにあわせて、市民と教員・学生がともに学べる場として、図書館の主催、COC 統括機構・社会連携センターの共催によりスタートしました。本学教員らが講師を務めた多彩でユニークなプログラムが好評を博しており、前々週に実施された「みんなの考古学 どきドキ講座 2017」では、通算の入場者数が 5,000 人を超えました。

セレモニーで図書館長の高橋修・人文社会科学部教授は、「大学を支えていただく地域の皆様に、大学を身近に感じてもらう場、自由で創造的な場になれるよう努力してきた。これまで参加、協力してくださった皆様に感謝したい」と謝意を述べました。

また、人文学部 4 年生の鈴木彩乃さんが学生代表としてスピーチをした。鈴木さんは、当時 1 年生だった開催初年度から土曜アカデミーに参加しており、今年 3 月に卒業を迎えます。高橋館長と参加者を前に、鈴木さんは、「多くの学外者が参加していることに最初は驚いた。私たちが学んでいる学問の価値が、社会に認められているということを実感できて嬉しかった」と振り返るとともに、「春から公務員になることが決まり、生涯学習にかかわる仕事を希望している。もしもそれが叶ったら、ぜひ土曜アカデミーのような多くの人を惹きつける企画をつくりたい」と語り、会場からあたたかい拍手が贈られました。

## ◆　【茨城大・東京医科大・茨城県立医療大】第 10 回三大学交流セミナー

2 月 26 日（月）、茨城県稲敷郡阿見町内に隣接してキャンパスを設けている茨城大学農学部・東京医科大学茨城医療センター・茨城県立医療大による「三大学交流セミナー」が、東京医科大学茨城医療センター内のホールで開催されました。

これまでは学術的な交流をメインに行ってきましたが、今回は第 10 回という節目を迎えたことからやや趣向を変え、「阿見町の高齢化に向けた各施設の取り組みと三大学の連携」というテーマを掲げました。セミナーには阿見町から町職員も参加する中、各大学の具体的な地域連携の現状や、より深刻な少子高齢化が進む地域の先進的な取り組みが報告されました。

東京医科大学茨城医療センターの齋藤 尚代 氏は、自身が主任を務める霞ヶ浦訪問看護ステーションの開設からの 20 年のあゆみと現在の課題を紹介した上で、医療職のケアマネージャーが少ないことに言及し、「大学としての組織的なサポートが必要」と、茨城県立医療大との連携にも期待を寄せました。

また、茨城県立医療大学の堀田 和司 教授は、町との連携事業として 2015 年にスタートした介護予防講座の取り組みを報告し、今後の拡大へ向けた学生を含むボランティアの仕組み作りに意欲を示しました。

茨城大学の牧山 正男 准教授は、農村計画学を専門とする立場から、日本一高齢化率が高いという群馬県南牧村での取り組みを事例として紹介。その上で、少子高齢化が進む地域に偏りが生じ、二極化しつつある傾向を示し、「ボランティアに取り組む意識の高い学生が大学の枠を超えて接触し、育っていくような場をつくっていきたい」と語りました。

これらの報告を踏まえ、阿見町高齢福祉課の湯原勝行課長は、「地域の支え合いの仕組み作りや新たな福祉サービスの創出は、行政だけでは到底できない。農業を活かした介護予防プログラム、介護と医療の連結、地域のケアリーダーの育成といった点で、今後も大学と連携していきたい」と話しました。

座長を務めた東京医科大学茨城医療センターの松崎 靖司 病院顧問は、「３大学の具体的な貢献から見た活動状況や町の意見がわかり、これからの阿見町についてどう考えるか、その一旦が浮き彫りになった」とまとめ、今後のさらなる連携と地域貢献を進めることを確認しました。

## ◆　ロードアイランド大学の学長による大学経営戦略に関する講演を実施

3 月 5 日（月）、米国のロードアイランド大学から学長のデービッド・M・ドゥーリー氏を招き、「米国中堅州立大学の経営戦略」と題した教職員対象の講演会を開催しました。

ドゥーリー氏は、国際的な量子線科学の研究・人材育成の拠点構築を進めている本学大学院理工学研究科量子線科学専攻において学外評価メンバーを務めています。今回は第 3 期中期目標・計画期間における中間評価のために本学を訪れ、それに合わせて講演会が企画されました。

講演でドゥーリー氏は、ロードアイランド大学の戦略的経営プランについて解説。90 カ国から多様な学生を受け入れていることに言及し、「現代の多くの問題は、１国だけでは片付けられず、背景の違う人たちと互いにリスペクトしながら解決することが必要になっている。全ての大学が国際的なフォーカスをもたなければならない」と述べました。

また、州立大学であっても運営資金への公的なサポートが日本より少ない状況において、「シェアド・ガバナンス」という開かれた大学運営の取り組みをしていることも紹介。具体的には、学内外含めて誰でも参加可能な「コミッティー」と呼ばれる場を用意し、大学の予算の優先順位についてオープンに検討を行うというもので、ドゥーリー氏は、「大学が進む方法を社会で共有するから、その後のサポートにつながる。時間のかかるアプローチだが、それを超えるベネフィットがある」と語りました。

質疑応答では、三村信男学長からの「学生のエンゲージメントを高めようとすると教員の負担が大きくなるという問題にどう対応するか」という質問に対し、「全ての教員が同じスケジュールである必要はない。教育重視か研究重視かといったように教員の要望に柔軟に合わせている」と答えるなど、両大学の置かれている状況の共通点と違いにも触れながら、活発な情報交換がなされました。

講演するドゥーリー氏

ドゥーリー氏に質問する三村学長

## ◆　授業デザインをアクティブ・ラーニングで学ぶ教員研修

3 月 13 日（火）、「講義形式授業において学生の学習を促進する授業デザイン」をテーマとした公開型 FD・SD 研修会を開催し、30 人以上の教員が参加しました。他大学の教員も加わり、学内組織や大学の枠を超えた活発な交流を通じて、教員が自らの授業を振り返る貴重な機会となりました。

この研修会は、茨城大学が平成 28 年度に採択された大学教育再生加速プログラム（AP 事業）テーマⅤ「卒業時における質保証の取り組みの強化」の一環で行われたもの。本学ではルーブリック等を活用した学習成果の測定と厳正な成績評価の実施により、内部質保証システムの構築を進めています。今回は、授業デザインという切り口で教育の質を向上させるツールや考え方について理解を深める研修として企画されました。

講師として、教育関係共同利用拠点の認定を受けている芝浦工業大学教育イノベーション推進センターの FD･SD 推進部門長を務めている榊原暢久氏を招きました。参加者は、榊原氏による多様な評価方法や学習に関する理論・法則などの説明を聞いたり、学んだことをグループやペアで活発に共有しあったりしながら、自らの授業を振り返り、評価方法や授業の展開などを見直しました。

講師の榊原氏

教員たちが自らアクティブ・ラーニングに取り組んだ

アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた研修を体験することで、参加した教員たちは、授業に臨む学生の立場をイメージしながら、授業改善のヒントを得た様子でした。最後の質疑応答では、「アクティブ・ラーニングの要素を取り入れることで、授業の中で扱えない領域が出てくるのではないか」「発達障害をもった学生にはどう対応するか」「受講者たちの知識にバラつきがある場合、どういうレベルの学生に重点を置くべきか」といった質問が次々と出されました。

研修に参加した理学部の教授は、「授業を変える具体的なヒントが得られた。アクティブ・ラーニングを取り入れた学習を、実際に体感できたことは大きく、ショックも受けた。学びの主体は学生であり、教員の自己満足では、結局いい授業とはいえない。今日学んだことを振り返り、授業改善につなげたい」と語りました。

太田寛行理事・副学長（教育統括）は、「全く異分野同士の教員が、普段の授業を念頭にアクティブに議論を行う、初めての機会となった。教育の質保証の取り組みは茨城大学の特徴的な強みのひとつ。今後も新任研修などの機会を利用して、同様の研修を行いたい」と話しています。

## ◆　学生発案のバス案内板が水戸駅にお目見え

水戸駅北口のバス乗り場に、本学人文学部の学生たちが発案したバス案内板が新設され、3 月 27 日（火）、学生や水戸市の担当職員、バス会社の関係者らの立ち会いのもと、案内板のお披露目式が行われました。

バス案内板を手がけたのは、人文学部で「プロジェクト実習」というアクティブ・ラーニングの授業を履修した 2 年生 10 人。この授業は、自治体や企業などとともに地域社会のさまざまな課題と向き合い、1 年間かけて成果を出すというものです。10 人は、公共交通事情の改善という課題について、水戸市交通政策課とともに取り組みました。

授業では、市職員からバスや鉄道、道路などをめぐる現状の課題について説明を受けたあと、職員と学生が一緒に議論をしながら、課題解決につながるアイディアをいくつか出し合います。その中で選ばれたのが、水戸駅北口のバス乗り場の案内板の改善でした。従来の案内板は 2010 年に設置されたもので、水戸市および周辺エリアのすべての路線・バス停が記載されており、必要な情報を得るのに効率が悪く、情報も一部古くなっていました。そこで学生たちは、バス利用者に聞き取り調査を実施し、それらの結果を踏まえてデザイン案をまとめました。

新しいバス案内板では、すべてのバス停を書き入れるのではなく、観光スポット付近のバス停など主要な行き先を 30 ヶ所程度に絞り、大きく表示させました。また、それぞれの行き先に行くには、何番のバス停で乗車し、運賃がいくらかという情報も一緒に記しました。

アイディアの実現に必要な資金の獲得のため、学生たちは「茨城県公共交通活性化会議・利用促進会議助成金」という助成プログラムに応募。見事認められ、30 万円の支援を得ました。

周辺を毎日散歩しているという男性は、「前のものと比べたらだいぶよくなった。これが学生の発案と聞いて驚いている」と評価しました。

人文学部の五位渕梓さんは、「一目で必要な情報がわかるように工夫をした。この案内板を見て、ひとりでも多くの人にバスを利用してほしい」と話していました。